ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.6 June 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

6

CONTENTS

- 巻頭言
  「みんなが天理教なら…」
  ／高見宇造 1
- ３代真柱様の思い出（１）
  「船遊び」と「仕切り根性」①
  ／井上昭夫 2
- 「元初まりの話」に登場する動物たち（29）
  「ふぐ」について ②
  ／佐藤孝則 3
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（18）
  戦前のカナダ伝道と日系移民社会 ①
  ／尾上貴行 4
- 「おふでさき」の標石的用法（34）
  動詞について ⑲
  ／深谷耕治 5
- 伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（11）
  宗教言語の翻訳 ④
  ／成田道広 6
- 現代世界に生きる「人間」と「宗教」―再考―（６）
  計算する機械と人間― チューリングテスト―①
  ／岡田正彦 7
- 遺跡からのメッセージ（35）
  文化遺産を今に活かす③ 東乗鞍古墳プロジェクトへの期待
  ／桑原久男 8
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（17）
  植民地統治における教育
  ／森　洋明 9
- ヴァチカン便り（32）
  シノド会議を控えて
  ／山口英雄 10
- 図書紹介（105）
  『動物保護入門　ドイツとギリシャに学ぶ共生の未来』
  ／堀内みどり 11
- 思案・試案・私案
  プライバシー
  ／八木三郎 12
- 平成 30 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（４）
  第１講：56「ゆうべはご苦労やった」
  ／高見宇造 13
- English Summary 14
- おやさと研究所ニュース 15
  ANU Religion Conference 2018 に参加・発表（堀内みどり）／「天理教事典第三版刊行を祝う会」開催／第 311 回研究報告会（中純子）／平成 30 年度公開教学講座／『天理教事典 第三版』案内

巻頭言

「みんなが天理教なら…」

おやさと研究所長　高見宇造　*Uzo Takami*

５月 14 日、「同和問題に取り組む兵庫県宗教教団連絡会議の年次大会」が神戸で開かれ、招かれて記念講演を務めた。我が国の宗教界は 1981 年、「『同和問題』にとりくむ宗教教団連帯会議」（同宗連）を結成している。これは 1979 年、第３回世界宗教者平和会議（アメリカ）において日本の代表者が行った部落差別発言の反省が契機となっている。以後、宗教界は連帯して部落差別の解消に取り組むことになる。1981 年には浄土真宗本願寺派・真宗大谷派・日本基督教団と天理教の４教団が共に次のように宗教界に呼び掛けた。

「神の国・佛の国を願うことは観念ではない。社会の現実を見すえ、積極的にかかわる生きざまにこそ、この証がある。……ここに、あらためて、深き反省のうえに、教えの根源にたちかえり、『同和問題』解決へのとりくみなくしては、もはや、日本における宗教者たりえないことを自覚し、ひろく、宗教者および宗教教団に、実践と連帯をよびかけるものである。」こうして生まれたのが「同宗連」である。現在は 65 教団が加盟している。

当時、国は深刻化する部落差別問題に官民を挙げて取り組んでいた。1961 年、政府は「同和対策審議会答申」を発表、「部落差別の解消は国の責務であり、国民的課題である」として 1969 年には「同和対策事業特別措置法」を施行、住宅や環境改善事業、教育面の対策を進めていた。以後、継続した取り組みにより大きく改善されることになる。しかし部落差別は未だ根強く現存している。中でも心理的差別、特に結婚に関わる差別が未だ解消されていない。

これは私が知り合った女性の話である。彼女は両親に見合い結婚を勧められ、双方とも「良いご縁」と話が進み、いよいよ結納となると先方から断りが来たという。それも一度ではない。二度三度となり、不自然に思った彼女は「私のどこがいけないの」と親を問い詰めた。親は察していたのだろう。被差別部落の出身であることを打ち明けられた。見合いの相手方が身元調査をし、その結果のお断りとなったのである。親は自らが経験した差別の現実を可愛い娘には受けさせないと懸命に働き、財を成し、「さあこれから」という時のことであった。「まるで影法師のように部落差別は付いてくる」、そう思われたそうだ。彼女は「私は生涯、幸せな結婚はできない」と思い詰め、身を持ち崩しかけていた。私は何か彼女の手助けがしたいと信仰の話をした。言うまでもなく、天理教には「世界一れつきょうだい」の教えがある。親神を親と仰ぐ人間は等しく兄弟姉妹という教えである。「一度、天理に行きませんか」と勧め、案内することになった。

教会本部の神殿周辺境内地には当時、子供たちに向けて「仲良くたすけあいます・生きる喜びを味わいます・物を大切にします」というメッセージが掲げられていた。これに興味を持ったのか、彼女はジッと見入っていた。「ところで高見さん、天理教の子供たちは幼い頃からこんな言葉を聞いて育つのですか？」と感慨深く、そして一言、「世の中の人、みんなが天理教なら良かったんですよね……」と呟かれた。彼女の受けてきた心の痛みを思うと、その言葉に私は絶句、立ち尽くした。「もしそうであったなら、私の受けた差別はなかったのではないか」という彼女の憤りであり、「こんな素晴らしい教え、信仰があるなら、一日も早く差別のない世の中にして下さい」という願いの言葉であった。この日から同宗連の呼び掛けた、「もはや、日本における宗教者たりえない」は忘れられない言葉として私の中にある。